統一團報

日蓮上人の教誨（接前）……聖應院
(9) 彩色に謬なきが如し
(10) 黒白分明
(11) 推、理、覽
(12) 耳根得道
(13) 開、其、義、趣
(14) 日蓮の劇
南無の義解……信唱院
小僧の愛嬌　南無の原語　南無の字義
苦命の取引　迷子の三太　自慢高慢馬鹿の内
誠諦之語　本門の三寶
一大事……妙光道人說教
人間各々希望なり　希望目的は箇々別々也
人生共通の一大事　死活問題
人間の本能　美德惡德
常樂院日經上人（接前）……野口義禪
經躰無間論の批評（如說修行抄に就て）……熱心生
一抄通不通の失　禁誡に背く失
方便を顧倒する失　當文解釋の失
祖聖日蓮と東條景信（下）……窪田純榮
みどりの一たゝり……松尾忍水
故國友知溪居士の吊文……數通
盛岡通信……小山理介
宗友會第五回の會合、題正會の宗祖降誕會、
弘通所の開山會、青森歩兵第五聯隊凍死者追悼會、
論文募集に就て

第八十三號

明治三十五年三月十五日發行

○執筆の人に　　宮澤圓臣

取り消せる四十二ことせのふみがらを
　　墓ひて身をば反古にするかも

○疾く一乗に歸せよかしとて

二つなき唯一乗の大船に
　　繰りてわたれくるしみの海

鷲の山高くかゝれる月見ねば
　　むれの曇りもいつか晴るゝ

○拙　　猿

またも手なのぶれば月のかげうせで
　　さしらの顔のおかしくぞある

統一圖報第八拾三號
（明治三十五年三月十五日發行）

日蓮上人の慈誨（承前）

聖應院稿

目次

(9)彩色に膠なきが如し　(10)墨白分明
(11)推理驚　(12)耳根得道
(13)同其義超　(14)日蓮の劍

(9)彩色に膠なきが如し

宗教にして道義の問題を苟且に附するは極めて不利益のことにして、若しも道義に就て明晰なる斷定を下さず、うの實行に向つて活力を賦與するなくんば、己にうの宗教は大部分の効用を滅失せるものと謂て可なり斯かる宗教は今後の社會に於て信任を失墜すべきは我等の信じて疑はざる所なり。世人は日蓮上人を評して倫理上の教誨に於て欠失ありと云へり。この批評は決して輕々に看過すべきにあらず

我等は日蓮上人の倫理觀を認めて、尤も明晰にして且確然不動たるを信ずるものなり、されど今の僧俗は殆ど上人の倫理觀に於て聾の如く啞の如し。うは彼等は未だ上人の倫理觀を窺はんことすら思附かずして、惰民を貪りつゝあるなり

近來佛教戒律に關し論爭するものあるを聞くも、僅かに肉食妻帶の如き枝葉の問題に向つて、皮相的解決を試みんとするなり、彼等は未だ佛教倫理の根本義を捉へ得ざるものゝ如し

上人の倫理觀は法華開顯の大教義に因由して、尤も明確なる結論に到達せり。うは世戒と第一義戒との接合を示せるもの是なり

今や具眼の士は、世俗の倫理はうの基礎の堅からざるを認識し、之に宗教的の信念を附與するの必要を感じ

又宗教的道義は迂遠狭劣なる律法を死守するを厭ひ、倫理と宗教とに就て両者うの何れをも改善を施すべきの必要を唱ふるものあるに至れり。これ眞に公平なる眼識を有するものと謂ふべし。若し果してこの方向に向つて、倫理と宗教とを導き來りて両者の提合を實現するを得ば、國家民人の幸慶何物か之に過ぎん

上人の倫理觀は、正しくこれ等具眼者の要求に適へるを見る　上人は法華開顕の教義に於ける五乗開會の法門を按挑すること尤も明瞭なり。人乗天乗聲聞乗緣覺乗菩薩乗の五乗は、何れも法華經の大教義中に溶融すと雖ども、聲聞緣覺菩薩の三乗は世戒にあらず出世戒なり。相待善にあらず絶待善として起りしなり。而して天乗も亦未來生天の目的を有する点より見ば未來戒にして現世戒にあらず。純乎たる世戒は只實に人間乗のみ。されば五乗悉く開會すと雖ども、人間乗の世戒にあらざるは何ぞ

私に曰く、この五戒は佛未だ出世し給はざる時外道等も之を、持てば人中天上に生ずと敎ゆるなり。但持犯ばかり沙汰して其上に佛敎を聞かんことを知らざるなり。佛世に出で給ひて此五戒を持て人身を受けての上に、佛法を聞て悟を開くと說き給ふなり

10)黑　白　分　明

近來推理の學勃興し、宗敎の研究も亦一に理論に傾きうの趨嚮する所遂に宗敎をして哲學の奴隷たらしめずんば止まざらんとす、この傾嚮趨勢は實來の佛敎徒が佛敎の精髓を沒却して荒唐不稽なる迷信に塡たされ、外道波羅門と倣ふなきに至れる痼疾沉病を治するに於て、多大なる効果を與へたるは夙に我等の欣ぶ所なるも、翌てこの趨嚮する所を省察するに、一面に弊害を去る。地面に新弊の蠭生せらるの嘆ある也

佛敎の青年が佛敎の眞味を知らず、徒に哲學の歸すべし、そは第一義戒の醇乎として醇なるもの復實に法華絶妙の大善あるのみ　この人間乗の世戒と一乗法華の第一義戒とを提合融會して實修實行せしめなば他の天乗乃至菩薩乗としての律法は、斷然廢捨して可なりと云ふにあり。只世戒は戒の根據薄弱なれば、法華經の第一義戒を受持し來りて世戒の根底となし。而してこの大善と世善との間に融合調和を試みたるのみならず、法華經の自身の教義が、この意義を發揮して小善成佛の妙旨を示せることを敎へ給へり

佛陀は俗戒經　悉第六に說て云く

當に戒に二種あることを觀ずべし、一には世戒二には第一義戒なり、若し三寶に依らずして戒を受くるは是れを世戒と名く、是の戒の堅からざること彩色に膠なきが如し是の故に我先づ三寶に歸依し、然して後戒を受く云々

一側半面を聞き信佛の動搖を來し、或は敎學の資格位地を顚倒し學者にもあらず宗敎家にもあらざる可憐の境遇に呻吟せるもの多きは、且らくこれ等青年の怠不精進の罪に歸するも、我等は彼の自ら宗敎大家を以て任じ、一世の觀聽を翕め佛敎の奥義を擅ふて起るかの如き地位にある人にして、うの主張主義を見れば憐れにも佛敎の大綱をだに理會し居らざるあり。これ豈嘆すべきのことならずとせんや

哲學は原理を研究しつゝある學問なり。宗敎は原理を躬達し來りて設化したる敎義なり、彼は材料の收集擇擇に從事しつゝあるなり此は材料を收集擇擇し終りて組織講成を示せるなり、彼は研究なり此は敎導なり、彼は實躬を尋求しつゝ彷徨せるなり、此は實躬を顯揚して坦々たる道を歩めるなり、彼は學問なり此は聞敎なり

起信の通路橋梁を進ぜんか、此に於て乎教の權實偏圓麁妙半滿の別を捨討すべき必要を認め來るべきなり

教は理を詮出するが爲めに起りたるは言を俟たず、若も理教の關係を離隔して教は理を詮出せずと云はゝ、宗教の起る所以あるなし、既に宗教と云ふ、理教相合ふものを信奉すべしと云はんか如きは畢竟無用の言なり、固より宗教を信奉するものは、うの宗教を認めて理教相合ふものとして信奉せるなり、若も理を求めて教を捨つと云はゝ、うは宗教にあらず推理の欲求智の欲のみ、如何ぞ宗教徒たるを得ん斷じて佛子にはあらず、佛子とは佛口所生の子と法華經に係し玉へるを知らずや

佛教とは佛陀の說法妙より起れり、佛教徒とは佛陀の說法妙に歸敬を捧ぐるの徒なり、佛教徒の實相觀ん身觀は如來の說法妙を通ふして始めて得らるべきなり、

んとせば先つ所依の經典に望めて以て是非すべしと判ずるもの、良に所以ある哉、若しも佛陀にして徹底不可說と知らば、この世に降臨し玉はざるなり、佛陀は可說の因緣を知るが故に來れり、我法妙難思言辭相寂滅とは云へ、佛陀は語言陀羅尼を現て、これを宣說すべき因緣と妙能とを有てり、近時の佛教徒口を開は漫に言亡慮絕と叫び、佛陀の說法妙を閑却し尤も恐べき遂坑破法の淵に淪溺せんとす、今にして警覺を加ふるなくんば一切衆生の大依止處を失却し去りなん、彼の散漫不統一なる樣教方便に泥著して、理教相隔たれるを顧みざる者の如きは、由來佛教徒中の精髓なり、うの非固より辨を須ひず、我等はこれ等の泥著を打擊すると共に、一面には理教相合へる實教を蔑視する迷謬を曉覺せずんばあらず、これ日蓮上人の慈誨にありて盛に權實判教の大綱格を論道し給へる所以なり

黑白の如く明に須彌芥子の如くなる勝劣猶ふべしとせり況や虛空の如くなる、理に迷はざるべしや、教の淺深をしらざれば理の淺深を辨ふる者なし、卷をへだて文前後すれば教門の色辨へがたし

(11) 推理魔

古來佛徒中闇禪に墮落せる一流あり、本邦人うの面脫の風を欣び滔々として之を珍重せり、近來學佛の徒かの哲學推理の思索に驅られ禪的臭味を喜び、口を開けは無言無教無字無說なりと唱り、曾て佛陀は方便知見波羅密皆悉く具足し、佛教は實惠方便惠の活用自在無碍なるを了せず、眞に笑ふべしとなす、今かれ等の謬想を曉さんが爲めに、かれ等が珍重せる楞伽楞嚴の法語を引き來りて、うの猛省を促さんとす

首楞嚴經の卷第九に「釋迦如來圓通の法を說き終り、將に法座を罷めんとして師子の牀に於て七寶の几を攬り、紫金山を廻らし再び來り凭り倚りて普く大衆及阿難に告げ玉ふ」こは滅後の佛子首楞嚴定を求めて魔見に墮つるもの多からんを愍み、諄々たる慈誨を留めんが爲めに再び說法を始め給ふものにして、佛陀婆心の切なる後世闇禪の徒を出さんことを憂慮し給ふが故なり、これより悲魔……狂魔……億魔……下劣易知足魔……愁魔……好喜樂魔……慢魔……好輕淸魔……惡魔……欲魔……等を明し玉ふ、今これ等十魔の說相を攬りて彼の闇禪の徒を照すに、殆ど一も遁るゝ處なく徹底十魔の見に淪沒せるを見る。

今この中慢魔の一節を揭げん

或は增上慢或は、卑劣慢、一時に俱に發して心中に尙ほ十方の如來を輕んず、何に況や聲聞緣覺をや、これを見勝れて惠の自ら救ふこと無きものと名く、悟れば則ち咎なし證道となすにあらず、若し證解を作らば則ち一分の大我慢魔有て、その心腑に入て堅廟を禮せず經像を摧毀す、檀越に謂て

言ふ此はこれ金銅或はこれ土木なり。經はこれ樹葉或はこれ曇花なり、肉身の眞常なるを自ら恭敬せずして、却て土木を崇む實に顚倒せりと爲す、うの深信するものうれに從て、毀ち碎き地中に埋め棄てゝ衆生を疑謗して無間獄に入る

長水の沙門子璿之を解して曰く。愚者の修禪者この見に隨す。並にこれ魔種なり、如來の像經の意を識らず且つ末世の住持は像經に依り因て出家し、學道これに籍て修す魔信因を壞ぶり經像を毀たしむと。又楞伽經に云へる所を見よ

佛若し說かずんば敎則ち滅壞すべし、敎若し滅壞せば誰か修行し及び得道するものあらん

愚者この文を見ず一向に佛に說なしと誘す、須らく知るべし無字無說の一邊に執し、理敎の關係を忘るゝものは、魔子なり大邪見の人なり

首楞嚴經には、この外に推理魔なるものを說玉へり心に根本を愛して物化の性の終始を窮覽し、其心を精爽にして辨折を貪求す、爾時に天魔うの便を候ひ得て精を飛して人に附く

この諸人等佛の涅槃菩提法身を持て、即是れ現前の我肉身の上にありとす父父子々遞代し相生すれば即是れ法身の常住にして絶へざるなり。都て現在を指して即ち佛國と爲して。別に淨居及金色の相なしと云ふ

これを惡鬼年老て魔と成てこの人を惱亂すと名く無言眞に功ありと誘れる陰法を學べる沙門波羅門よ、猛省する所あれ

立正觀鈔（内三十八）

禪宗の一門の云く、松に藤懸る松枯れ藤枯れて後如何不レ枯ェ上ァ一枝なんぞ云ふ天魔の語を深く信ずる故なり。修多羅の敎主は如ゝ藤、各々に雖錚論佛入滅して敎法の威德も無し、爰に知ぬ修多羅の敎は指レ月指也、禪の一法微妙也と。親ばく之見性直達する也と云ふ大誇法の天魔の所爲を信する故也。然に法華經の佛は壽命無量にして常住不滅の佛也禪宗は滅度の佛と見が故に外道の無の見也

開目抄（内三）

禪宗は下賤の者一分の德あつて父母をさゞるが如し。佛をさげ經をくだす、此皆本尊に迷へり

(12)耳根得道

開思修の三惠は佛敎の通路なり。佛陀の世に興るや音聲を以て羣類を化す、一機として耳根に從て敎を聞て悟入せずと云ふものなし。我等人類の棲息せる娑婆世界は耳根得道の衆生なり苟も佛敎徒たるものはこの機を知らずんばあらず、實相は文字を離れ語言を絶すと云ふが如きは、佛子にあらざる俗人すら知了せる所なり、名の名とすべきは常名にあらず、常名にあらずとは云へ名なくんば入道の方便なし、この方便實に是れ如來の方便なり。假の名字を以て衆生を引導するは權敎なり、妙の名字を以て實相を詮し能詮所詮相合ふて理敎不二なるもの是れ則ち實敎なり、若し實敎なくんば我等は恐くは得道の因緣を得ず。天台は之を法華玄義の六卷に釋して。此の土は耳根利なり故に偏に聲塵を用ふと言ひ、又文字を離れて解脫を說くなし文字性離すれば即是れ解脫なりと判せり。佛陀は文殊師利法王子等に問ふて曰く、我滅後此界の衆生菩薩乘に入て無上道を求めんに、何れの方便の門か成就し易きことを得んと。時に文殊師利は佛陀の慈旨を奉して對へて曰く、方便に多門あり我今世尊に白す、佛娑婆世界に出て給ふ此の方の眞の敎體は清淨にして音聞に在り三摩提を取らんと欲せば實に以て聞の中より入りて苦を離れて解脫を得ん。今この娑婆國は聲論を以て宣明することを得んと

寶くは佛口所生の子よ、偏に聲塵を用ふの判釋と聞の中より入るの經說とを服膺して、耳根得道の大因緣を了し、漫りに言亡慮絕と呼びて哲學の奴隸となることを止めよ

一念三千法門（外十七）

此娑婆世界は耳根得道の國也

(13)問　其義趣

佛敎の通じて外道化し去り、日蓮宗の概して溶融化し了れるは、畢竟法師敎を宣べず檀越敎を聞かず、攝手して形式と習慣とに放任せるの結果ならんのみ、實に僧は宣敎を怠り俗は聞敎を樂はず、與敎扶宗の動作全くこの大因緣を開却せり、豈慨して亦慨すべきのことならずや

史を案ずるに法華八講の行はれし當時は、我國人うの僧たると俗たるとを問はず、多少の學識あるものは皆法華經の義趣を聽聞するを以て唯一の歡樂となし、宮中にこの式典の行はるゝ時の如き、うの義容の盛なる眞に追慕に堪ざるものあり、我等は日蓮上人の遺書を拜する毎に、うの授與を受けたる弟子檀越の如何に敎義思想に富めりしかを想見し、當時の信仰界の光景に對し敬慕の念禁ずるなし、今や滔々たる佛敎徒若しくは日宗敎徒を通觀するに、うの敎義思想の銷沉せること實に古來未曾有なるべし文化の旺盛に誇り宗敎の必要を自覺せりと稱する國民としては、如何にも解し難き現象にてあるなり

聞くことを喜ばざるものは怨なり、佛陀を奉ずと稱するものは、數千萬人、而して佛陀の敎を聞くことを喜ぶもの果して幾人かある、日蓮上人を喜ぶもの數百萬人而して上人の敎を聞くことを喜ぶもの果して幾人かある、嗚呼佛敎徒の外道化し去り、日宗徒の淫祠化し了るは所由なきにあらず

佛陀は聽法の功德を勸奬し給ふこと至れり、盡せり、法華經の隨喜品を見よ、僅かに聽法の席に於て「勤めて座して聽かしめ若は座を分て坐せしめんに」うの功德を讚して帝釋の座處梵天王の座處轉輪聖王所座の處を得んと云ふ、嘉祥大師は但分座の義邊を取るが故に三界の報を得、若し聽法の邊に就かば稱則ち無邊なりと釋し、義決には此は華報に約す若し果報を論せば佛の座處を得べしと判せり、斯くの如く經判には聽法を排斥せり、而して今の僧俗は宣敎を怠り聽法を樂はず何ぞ佛子の分を失へることを慚愧せざるや

佛陀は優婆塞戒經二卷に於て、聽法の十六則を示し給へり

從レ他聽時具二十六事一

(1)時聽……時を以て聽くことにて一ヶ月に何回と定めて聽法の時を設けよ

(2)樂聽……樂ふて聽くことにて、法を聽くことを中心より喜び樂ふて聽くべく、

(3)至心聽……法を聽くに當りては、精神を籠めて聞くべく、聽法の席にて眠るが如きは大に不可なり

(4)恭敬聽……說かるゝ法を敬ふて謹聽すべし

(5)不二求レ過聽一……說く人の欠點を見出さんなどの心を以て聽くべからず

(6)不二爲二論議一聽二……法を聽てうの人と議論しようと思ふ如き心にて聽べからず

(7)不二爲レ勝聽一……他の者に勝たんと思ふ如き法門自慢の心を起して聽べからず

(8)聽時不レ輕二說者一……法を聽く時說く人を輕蔑する心を起すべからず

(9)聽時不レ輕レ法……法に對して輕侮の心あるべからず

交際の爲めに參詣する如き心を誡むるなり

(10)聽時不ニ自輕一……自身を輕しめ到底我等は佛法を聞くも解らねなぞと思ふべからず

11)聽時遠ニ離五苦一……法を聽く時は自身の五陰の苦を思ふべからず心を落付けて聽くべし

(12)聽時爲ニ受持讀一……法を無責任に聞くべからず、聽放しにすへからず、必ずうの教を受け持ち又後々迄も忘れぬ心掛にて聽くべし

(13)聽時爲レ除ニ五欲一……法を聞くは五欲の惑を除き劣等の思想を斥けん爲にすべし

(14)聽時爲レ具ニ信心一……法を聽くは信心の增進することを第一の目的と心得べし

(15)聽時爲レ調ニ衆生一……法を聽く所以は、聽已て後うの教に依りて世の人々の誤れることを調へ直して社會の爲めになるようと心掛くべし

(16)聽時爲レ斷ニ聞根……これは聞根とて心の本に聲を聞て精神を動かすものあり、この精神の動搖せざる迄の悟を開かんと心掛くることなり

尙ほ佛陀は同經の三の卷に於て左の如く示せり

四十里中に講法の處あるに、往て聽く能はずんば失意罪を得んと

六丁を以て一里とせば二百四十丁なり。三十六丁に算換せば六里廿四丁なり。この六里二十四丁己内に於て說教演說の開かれたる場合に參聽せざるものを失意罪なりと誡め給ふ、以て佛陀が聽法の因緣を勸め給へることの深きを知るべきなり

與阿佛房尼書（外二十三）

尼御前の御身として講法の罪の淺深輕重の義を問はせ給ふ事、まことにありがたき女人にておはすなり。龍女に豈劣るべきや、我聞大乘經度脫苦衆生とは是なり、問其義趣是則爲難と云て法華經の義理を問ふ人はかたしと說れて候。相摸て力あらんはをは謗法をばとめさせ給ふべし。日蓮が義を助け給ふ事不思議に覺へ候ぞ不思議に覺へ候ぞ

14)日蓮の劍

日蓮上人が四面敎敵の裡に立ち能く之を切り順へたまへるは、抑も千將莫耶の名劍を振ひ給へるに由らずんばあらず、上人の劍は武夫の持てる劍にあらず、聖賢の持てる劍なり、殺人劍にあらず活人劍なり、慈悲忍辱の血涙もて鍛ひ上げたる寶劍なり、世人は上人を指して剛雄殺伐の法師と想へり、何ぞ知らん上人は溫容慈顏才も親み易き慈忍の法師にてあらんとは、されば上人の性格を窺はんと欲するものは、上人が生命を捧げて敬慕し給へる法華經の內容に包まれたる理想を將ち來りて之を考察せずんばあらず

法華經法師品には慈悲室忍辱衣座等の三軌を示し、安樂行品には慈悲行、離憍慢行、離嫉妬行、智惠行の四行を明せり。而して上人が法華經を敬信せることの篤き之を口に文字として讀むの法師にあらず、能く色心二法に經て之を讀破せり。心はこの理想を銘錄し身はこの敎訓を實行せる具足の法師なり、無礙の法師なり、中道の法師なり、根淨の法師なり、難壞の法師なり、無諍の法師なり、雄勇の法師なり、解行の法師なり、誠諦の法師なり、道行の法師なり、無着の法師なり、福惠の法師なり、自軌軌他の大法師なり、日月光の如く衆生の闇を破る如來使なり、巧於難問答其心無所畏忍辱心決定堅正有威德の大導師にてあるなり

敎敵怨嫉の圍中に在りて統一軍の戰線に進まんとする戰士は、先づ上人の如く慈忍の寶劍を提げずんばあらず、不軌殺伐は上人の劍にあらず、實惠方便惠の妙

用は上人の劍法なり、解を恃み他を凌ぎ己を美して人を惡むの憍慢と、他の已に勝るを嫉む嫉妬との二病は上人の寶劍を折る巨患なり、若し能く慈忍の寶劍を提げて起ち、二惠の劍法を理會して憍慢と嫉妬との病を去らば、向前敵なく海內靡然として服せん、記臆せよ我軍の戰士、日蓮の劍は伏して敵の爲めに折れず、唯僧士が憍慢と嫉妬との巨患は、この寶劍を段々に壞し去りて復用ゐるなきに至らんかな、戰士解せりや否や

佐渡御書（內十七）

鐵は炭打て劍となる、賢聖は鳥言して試みるなるべし

毀譽に動くの材は、毀譽以下の材也、自ら其材を恃むに、其材以下の材也、是れ常恥材にして獨立ざる大材をあらず

●南無の義解

信唱院　說教

今日は『南無』と申す佛教の用語を、本宗の宗義眼を以て、說教することにしよう。

拙僧が未だ十二三の小僧であッた頃、或安信家の噂しを聞いたのに、南無とは南無しと訓で、何人も南風を惡いと言ふものは無いと申すことぢやさうな、うの頃は此噂しを眞に受て談顏に物知りさうな振りで、愚痴盲昧の信者を相手に、噂しをして、小僧なか〳〵持てた愛嬌談であッた聽聞衆よマーお哄笑なさるな、拙僧の愛嬌談はまだある、但しこん度のは小僧の失敗談らしい、がしかし趣味はうの內に幾分か含んで居る、矢張拙僧が十二三の時、平生懇意にする或念佛凝りの家をゝとなひ、小僧小癪にも念佛無間論をやらかした對手は大人でしかも其土地では物知株の中老の人だ、

老人「しかし小僧さん法華は提坊宗旨だよ、なせならば阿彌陀樣の御冠は南無の二字だが、法華では冠を盜んで、小僧辨解に窮して、御題目の帽子にして居るではない歟」とサーに浮んだのは神力品だ、小僧「御爺さん、でも神力品には南無釋迦牟尼佛〳〵とあるよ、だから御題目の南無は御釋迦樣のを借りたので、阿彌陀樣のを盜んだのではないヲ」と辨疏して漸々難關を切拔けた、これには老人二の句が出なかッた、老人「小僧さんエライ今に好い坊さんになるだらう」と褒められたことがある……以上は俗論で拙僧の愛嬌談でムる。

『南無』とは印度語で古書には「南謨」「那謨」「南摩」等の文字も用ゐてある、これを支那の字義に翻譯すると「歸命」「度我」「恭敬」「信從」の四義がある、これより字義を說かう。

一に『歸命』とは命掛で歸依するの意義で仇や愚の問題でない、「有情の第一の寶は命に過ぎたるはなし」（主君參）この貴重なる生命を棒に振ッても惜くない信仰問題！、はてなどんな信仰であらうか、生命にも短壽長壽の區別がある、凡人共の壽命は「人生わづか五十年」して見れば短壽に相違ない、佛陀豫に本佛釋尊の壽命は「佛壽長遠」！「常住にして滅せず」「不老不死」！、されば長壽は佛壽だ、佛壽と凡夫壽との更換、ありがたひ、損はない、ハハ——わがッた、宗祖上人が龍の口の斷頭場に臨み「命を法華經の爲に捨つるは石瓦を以て黃金にかゆるの喜びなり」と平左衛門等に申聞けたのは、凡夫壽と佛壽の取引さだ、成程わかッたゝれを知らないで躊躇するのは損得をしらない馬鹿の骨頂、どうで經文に「我レ不レ愛ニ身命一」「不ニ自ラ惜身命一」「死レ身弘レ法」等とある筈だ、うこで凡夫壽と佛壽の更換がマンマと出來て、一擧千金の大富有者となるには、またうれ丈の契約手形が入用なので妙法蓮華經は本地淨土の本店主釋迦牟尼佛の制定したる契約

手形である、この手形を我々凡夫共が手に入れようとするには、命掛けの契約を爲ねばならぬ、この手續を了して、凡夫即佛・即身成佛の大利益を占めたのが即ち……南無妙法蓮華經である

二に『度我』とは我々凡夫共を濟度し給へとの意義で救濟を希求する可憐の信仰心である、依賴心…ナンダか意氣地がない、獨立自尊…吾人の欲する處、うの言や好矣、うの意氣や賞すべし、だが禪の骨切何にかせん、さればとて眼がわるい、うれ日朝樣、藥師樣、腰から下の病だ、指守樣、痔の神樣に限る。世の中が厭忌になッた、死に神樣、阿彌陀樣を頼む。やれ金儲にや稻荷、托物には鬼子母神と云ふような工合に、迷子の三太よろしくとでも言いたい迷信者流は、とても度我の仲間入は出來ぬ、「無道心のもの生死を離るべからず」(開目鈔)道心は菩提心で、菩提心は成佛を求むる信仰心である、所謂る「出二離生死一證二大菩提一」「今身より佛身に至らんを期す」てふ至誠心を度我と云ふので、最も高潔で眞面目な宗教心を云ふのだ、この思想の欠てるものは愚心魔心に惑入られて居る惑者でなんともかとも言ひやうのない獄卒と言ふべしとやうこと

「妙法蓮華經は三世諸佛の御師、衆生成佛の導師」(曼荼羅鈔)であるから、我等の菩提の心を發起して、救濟を眞淨の大法に希求するのでうこと……南無妙法蓮華經…と云ふ。

三に『恭敬』とは自己を卑ふし身上のものを尊敬するの意義で、上下の分井然として乱れざるを云ふ。自慢高慢馬鹿の内、「我慢偏執は今生のかざり未來のはだし」(持法華問答鈔)である、が少しばかりの信心、僅かばかり學問をすると直に信心慢、學問慢が出て、謙讓謹慎、眞摯、素朴、至誠、着實等の美德を毀つ、誠に傷はしき次第である、宗祖上人ですら「日蓮は言ふに甲斐なき凡夫なりしが、法華經を弘むれば佛の使にも

似たり」と仰せられたので、我等が上人の跡を慕ひ、妙法五字を受持するには、ひたすら自己を卑しめ佛陀をあがめ、恭敬心を以て無上の正法を行じねばならぬこれを……南無妙法蓮華經と云ふ

四に『信從』とは凡夫の妄念疑惑を抛て佛陀の聖旨に信服隨從するの意義で、信仰の對象に同化するを云ふ我々には兎角どうだかといふ惑疑心猶豫心があッて、佛陀の誡語實言までも、あやぶんでかゝる癖性があるので寔に困る、實はこの妄念が元品の無明といふので迷の根源である、經文に「生レ疑不レ信者即當レ墮二惡道一」と誡めたのは佛陀の慈言で、猥に旨從を強いたものでない、汝等智あらんもの此(所詮題目を指す)れに於て疑を生ずることなかれ、まさに斷して永く盡きしむべし、佛語(所詮題目を指す)は實にして虚しからず(法華經壽量品)時代思想に酔へるの徒よ、此の文を繰讀して、どうだか思想をサッと拾て、少し

は眞人間になるが宜い、「法華のみ名を受持(南無のこと)せんものは福量るべからず」(法華經陀羅尼品)「此經を受持すべし是人佛道に於て決定疑ひあることなし」(法華經神力品)「是の好き良桑(題目)を今留て此に在く汝ぢ取て服(南無のこと)すべし愈へずと憂ふることなかれ」(法華經壽量品)と、これ等は皆千歳萬歳にも値遇しがたき妙法に對し、信服隨從をすゝめたので、釋尊毎自の悲願である「小兒乳を含むにうの味を知らざれども自然に身を養ふ、耆婆の妙藥誰か辨て之を服せん　水は心なけれども火を消す、火は心なけれども物をやく。妙法蓮華經の五字は經の文にあらず、うの義にあらず唯一部(法華經)の意ならくのみ、初心の行者うの心を知らずとも之を行(南無のこと)すれば自然にうの意に當る也」(四信五品鈔)、「今日蓮は建長五年四月二十八日より今年弘安三年十二月に至るまで、廿八年の間又他事もなく唯南無妙法蓮

華經の七字五字を、日本國の一切衆生の口に入んと願ひ計りなり。是即母が赤子の口に乳を入んと願む慈悲なり（八幡鈔）とは日蓮上人が如來の使となりて、我等に信服隨從の本義を、教訓なされた如來事であるだから……南無妙法蓮華經……と云ふ。

以上『南無』には「歸命」「度我」「恭敬」「信從」の四義ある、歸命の殉死的決心、度我の求護的依賴心、恭敬の公德的禮讃心、信從の眞良的柔順心をうろおてこう南無の信仰は立つのだ。さうして眞に南無すべきものは妙法蓮華經の五字に限る、うの次に南無すべきものは佛法界では、うの界の本主久遠實成の釋迦牟尼佛で九界では上首唱導の上行菩薩である、これを「本門常住の三寶」と云ふ。うの他の佛菩薩等は順次この割合で株券相當の配當利分に預るべきである、但し佛菩薩等は如何に淺深高下の差別ありとするも、概して妙法の敎光を蒙ぶる居るので、極上極下一人あるのみはしれくも出來ない、この般の消息を最もよく組織して、我等閻浮の凡夫共に授け給ひしが、宗祖上人の、大漫荼羅である、うれに付ても……南無妙法蓮華經……！！！

（完）

虛言宗道理で一を三と讀み　圓藏

一大事

妙光道人　說敎

一大事と云へば等閑に附することのできぬ、重要の事柄であることは敢て辨を俟たぬことである

偖て其一大事なるものは、人々箇々の希望目的に依りて各々異なるものであらうかと思ふ、政治家を以て世に立つものと、學者を以て世に立つものと、商業を營むものと、農事を業とするものと、是等は其希望目的の相同じからざるは當然のことである、又同政治家中に於ても、位置責任に依り其希望目的を異にし、同學者中に於ても人々に依りて其希望目的を異にし、商業を營むもの丶中に於ても、業務に依りて其希望目的を異にし、農家のものとても身分に依りて、其希望目的が箇々異なれば其希望に依り、目的に依り、其認めて以て一大事と爲すこと亦異なる道理である、例せば政治家は、廟堂に立て天下の人心を收攬して、政權を掌握せんことを以て其身の一大事と思へるに相違ない、學者は各々志す所の學科を專攻し、博學强記の人たらんことを以て其身の一大事として居るであらう、商業家は其商業に振りて、富裕の身とならんことを以て、其身の一大事とせるは亦疑なきことである、細密に觀せば同一の政治家、學者、商業家、農業家、其他凡百の人々、其分に應じ其境遇に依り、うれ相當の事柄を以て一大事と思惟しつ丶あるは明白であらう、

併し乍ら其何人を問はず、其希望目的如何を論せず、都ての人々に共通せる一大事たるものがある、其は何物であるか、余は信仰其物が一般の人々の一大事であると思ふ、何故に信仰が一般の人々の一大事である歟是れ實に何人も疑問を懷く處であらうと思ふ、此疑問が氷解せらるゝに至らば、信仰其物の價値が始めて分るのである、抑も信仰が吾人一般の人々に取りて、一大事たる所以のものは那點にあるかと云ふに、信仰は吾人の死活問題たることを熟知せねばならぬ、吾々一生涯の間幾多重要の事件に接することあるも、而も吾々が死活に關する問題ほど一大事なものはなからうと思はれる、所謂信仰の有無に依りて其死活を判斷するのである、一寸聞けば甚だ極端の樣なれども、實眞うれに相違なきことゝ自分は信じて居ります、其れに就き自分の考へを一通り述べてみましよふ先つ死活と云ふことに就ましして、世間の人々が思へるが如き生命の有無に依て判別するのと大に其趣を異にして居るのである、凡う人間には人間特長の本能がある、如何に高

貴の閥族に生るゝも、如何に幾百萬の資産を有するも如何に飛鳥を落すの權威あるものも、是等を以て死活を斷するの標榜とするに足らぬ、人間の本能を全ふすると否とに依て以て、其死活を判するは最も道理あることゝ思ふ

其人間の本能とは、常に慈悲の心に住し、善事に隨喜し、能く愛著の心を捨て、貪慾を離れ　慈施に志し慢を去つて慎重の心を持し、常に瞋志を鎮めて忍辱の心を起し、懈怠に流れずして精進の意思を持し散乱浮薄を好まずして靜慮の心を起し、愚痴心を除きて智識を研き、博く一般を愛し進では煩惱心を除滅し、有漏の世間よりも無漏の出世間道に心を寄する等　是等幾多の善美德を全ふするのは、是れ人間當然の仕事であるから、之を人間の本能と稱して毫も差支はあるまい、此本能を盡すものこそ眞に活ける人と云べきである、之に反し人間として安りに殺戮を好みて自ら快とせず、一時憤恚のために人に危害を加へ、嫉妬にかられて善事業を妨げ、愚痴を起して人をねたむに至り、慳貪の心を起して他人の物までも占領せんとし、兎角愛著のために何つまでもぐづ〳〵するが如き、懈怠に流れて進取の氣象を失し、慢浮薄に流れ毫も慈善心なきもの、是等は人間の美德を殺し、人間の圏外に逸出せるものにして、猶ほ死せるが如きものと見てよいであらう、世間が惡德の人を以て充たさるゝに至らば世は闇黑にして死せるよりも一層害毒が甚しきことゝ思ふ、少し極端かは知らねども、茲に死活と云へる其意義は前に列擧せる、人間の美德を標榜として、之を全ふすると否とに依りて論ずるのである、

是等人間の美德を全ふして、眞に活ける善良の人だらんことは、其何人を問はず如何なる方面の人々にても人として一般望むべきことであるまいか、若し之を望まざる人ありとすればうは嘘として欺瞞せる死物としか

解られぬ、それで其人間の美德が、一宗の信仰に依りて生ずるのであるから、信仰なるものが一般の人々に通りて一大事であるのだ、果して信仰なるものが其れほど力あるものかなきものか、之より說くことに致します

（つゞく）

不惜身命　常樂院日經上人　（接前）

在總本山　野口　義麟稿

江戸問答一

上人喜曰「我が祖師日蓮大士常に公場に於て法論することを願ひたるも。時到らず此事叶はずして止めり。我が先輩共に此儀を主張しれとも皆果さず。今や天下一統の世今にして三國通戒の法論を開かば祖師先輩の念願も滿か達し。佛天三寶の大恩も報ゆるに至る豈此上の喜やある」と此時上人與二善導寺書曰予熙怡堪然德德鄰、在於二理非明察場一降二念場無間釀載一擬二浮土一宗法營一在二掌握中一云々上人當時の意氣可レ想一時に官某意を上人に傳へて曰「今回の事眞に容易ならず今度廿三箇條の法門は日經の卒爾にて候御免可被下の一札を捧くへし。然るときは某上人の爲に身上事無さに許るべし貴意如何に」と上人聞曰「好意忝なしと雖も某が申す所の廿三箇條は皆法華經の文と我宗旨の立義にて候今一筆を捧げば事小なるに似たれとも却て大事にて候。法華經と宗旨との本意を破り經文は卒爾の經。日蓮は卒爾の人になり候はん。愚僧が身は假令駿河の辻に生理にせられ百日百夜鋸にて頸をひかるゝとも此詫言は申されじ」と終に駿府に到る。家康公上人を駿府に召し諸國法然の徒衆を呼集め。之に應答せしめんと思へとも一人として上人の問難に答ふるものなし。家康公思ふ所ありとて終に上人を江戸に召す

上人江戸に向はんとし弟子等を顧て曰「我が此行如何なる重刑に處せらるゝも豫め知るべからず然れども象て期したることなれば我は我が所信に向はんのみと」縷々として江戸に上る。

先之上人に隨從するもの五百八十餘人と聞く其江戸に至るに遂んて上人に從ふもの唯四人のみ。天下亦上人に與するものなし偶日秀師なるもの總南の講座にあり。聞之之曰「法王世に在り廣く群生を度す而も現在惡緣多し況んや滅後をや。我高祖師偏に無上道を惜み。龍口斷頭場に臨むも凜乎として變せと。恒曰若し惡王世にあり。法華經を失せは身命を喪ふと雖も隨ふべからず」と今や宗徒百萬挙り當業院師のみ確乎たり宜しく力を憑すへし」と。蒼皇來りて師弟の約を結ふ時に年三十二蓋し奇遇なり。師弟六人蟹町宿所に在りて徐かに命令の下るを待居たり

對論の事は仰出されたり。期日は慶長十三年十一月十五日と定まりたり師弟喜曰「祖師の本懐を達するは愈明日となりぬ。明日は如何なる吉日ぞと」其夜は夫々の準備に更爛せり杖木瓦石面打擲之は勤持品の明華經の行者終に免るへからざるか其夜丑滿の頃。何者とも分たず。武士姿の者數十人。深く面部を覆ひ各棍棒を携へ無斷に上人の居室に闖入し。師弟を捕へ縱横に打擲し。足を折り腕を挫き。殆と死に到れるを見て何處ともなく。行き去れり。豈無慚の所爲ならずや

明れは十一月十五日。愈問答の當日とはなれり。然れとも此大難に遭遇せる日柳。如何でか出仕の叶ふべきや其健臥居たるを侍共數多人來り。汝等不屈者上意を忘れたるか。弟子等の申狀をも聞き容れず師弟を戸板に乗せ。城内へと擔ぎ入れたり　（以下號次）

聖祖日蓮と東條景信（下）

孤松窪田綱榮

和風先春の消息を傳ふれば。黄鸝は隨つて韶光の由來を說き。悲雨蕭々として陰雲秋の天地を包めば。空谷の悲猿孤客をして旅情に堪ざらしむ。屈指すれば星霜を重ねること茲に拾有二年。寸秒も去り難き東條景信の宿怨。之を散するは开も何の日ぞ。

歳や逝き月や去り。而して其日其時は來れり。則ち文永元年十一月十一日。東條左衛門景信身は小具足を以て固め。與黨數百人を引率して。聖祖日蓮を小松原の街路に待ち。不意に要擊して積年の鬱憤を晴し。公衆の信仰を攪乱せんと圖れる眞言密乘の法敵を滅さんと欲す。嗚呼將に危機は逼れり。少がに一髪の間。

曾て聖祖日蓮は權敎門徒の讒に遇ひ。豆州の伊東に謫せられ居ること茲に三春秋。幸にして赦免の膝を得て鎌倉に歸り。再ひ松葉谷の草廬に住す。而して文永元年八月先考の墓に展し。慈母の孤情を慰めんと欲し。颯々たる松風に送られて。故鄉房州に歸省せり。

聖人の母梅菊齡七旬を超ゆ。遂かに病て死す。依之吾法若し弘ならば慈母の蒼生を以てせよと三寶佛天に祈誓を籠め。幸にして再び蘇活の現登を得たり。

九月華房蓮華寺に寓し宗敎一策を著はす。十月師範法印道善來り訪ふ。斯に久濶の情を叙して和氣堂に充つ而して談法義に及び敎の權實理の淺深。沼々數百萬言を重ねて邪正を明說し。成佛不成の差異を判論して。法印道善を懇諭し。斯に袂を別つに至る。

此時に際して房州天津の領主。工藤左近之承吉隆。書を致して聖祖日蓮を屈請す。之に依て日朗日澄鏡忍乘觀等を伴なひ。將に天津に趣かんと欲し。今や小松原を過んとす。徒弟鏡忍仰ひで蒼空を望めば。一竿の行鴈俄然として散乱せり。是れ果して何の兆り。

行鴈列を乱さば野に伏兵ありと。是れ當に兵家の語る處。往昔八幡太郎義家奥州金澤の敵を攻んとせし時。之を實驗せしは既に我國戰史の傳ふる處。而して彼は大江の匡房に之を學べりと。

果して陣貝は響き陣太鼓は鳴れり。靜穩なる小松原は今や一變して。修羅叫喚の巷となりぬ。東條景信の率ひたる徒黨走卒。其數一百餘人身は小具足を以て固め或は薙刀又は槍。若くは弓を携ふるもの等。山をも拔べき勢ひを以て前後左右より現れ出つ。

太刀打の音矢叫びの聲山河も爲に震ふべく。劍戟は秋

の尾花歟。射る矢は時雨のうれにも似たり。迸ばしる血は路傍の草を染め。或は進み或は退き。何時果べくも見へざりし。而して聖祖日蓮は今や之れ囊中の鼠。蟻蟻の出づべき活路もなかりけり。

縱横無盡に馬蹄を廻らし。積年の怨に酬ひんと。怒りの眼に血を注ける。東條景信は。當の敵たる。聖日蓮を望み奮然劍を揮つて進み來り。積年の怨み恩ひ知れよと呼びたる。其勢ひは宛かも嵐の一陣の疾風。滿木の枯葉を拂ふか如き觀ありし。

鏡忍坊日鏡之に驚き。身を以て景信を遮ぎり。乘觀長英馳せ來り救ふと雖も。然れとも敵は多勢味方は僅かに五人に過きす。寡は以て衆に敵すべからす。弱は固より强を禦く能はさるは。理の當に然る處。如何してか能く之に當らん。

遂に鏡忍坊は數ヶ所の負傷に斃れ。佐藤次は敵の矢にかゝれり。乘觀長英鬼神を欺くの勇ありて。如何に死力を盡すと雖とも。到底敵を破る能はさるは論なく。不惜身命の覺悟は彼等の全身に充ち。假令身は寸斷にせらるゝも。牢固として一歩も退かさるや明かなり。然れとも如何せば此の虎口を遁れ得るぞ。

諸天晝夜常爲法故。而衛護之。天諸童子以爲給使。刀杖不加毒不能害の金言は。將に事實によつて證明を與へたり。則ち工藤吉隆。北浦忠吾。同苗忠内郎等を俱して。聖人を途に迎へんが爲に。小松原の大道に來れり。而して彼等の鼓膜に響けるものは時ならぬ人馬の音調靜の聲。

彼等は驚けり實に驚けり。兵馬の權北條氏の手に握られて已來久しく耳にせさりし劍戟の響き。所も何事の起りしならんか。先つ其實否を糺さんと。天馬空を走るの勢ひを以て馳出し。近つき望めばこは如何に。聖祖日蓮は白刃の林に維がるゝが如し。彼等は此の暴狀に驚けり。豈に理非を問ふの遑あらんや。

東條景信遙かに此の一行の來れるを望み。直ちに一箭以て工藤吉隆を殺さんと。急雨の如く發射を試みけるも。遂に果す能はさりし。斯に於てか力を揮ふて吉隆に戰ひを挑み。刀を交すこと七八合。然るに景信の刀法は亂れ將に危からんとす。郎等之を見て大に驚き。前後左右より吉隆を圍み。遂に防ぐ能はすして嗚呼吉隆は外護の爲に死せり。

之に依て景信は其餘威を頼み。聖祖日蓮に肉薄し來り其頭上を望んで一閃の秋水は落下せり。此咄嗟の間に身を避んとせし聖人は。不幸にして額に三寸の傷を受けたり。然るに剛毅の聖人大聲吒吒。其亡狀を怒り景信を睥睨せらる。彼は周章狼狽の極。雨眼爲に瞑眩し投るが如く落馬し。遂に其宿憤を果す能はさりし。之が爲に東條景信は奇病を發せり。日夜煩悶懊惱の狀筆に寫すべくもあらす。假令耆婆の妙法扁昔の神術を盡すあるも。到底藥石の奏効は望み得べからす。病魔は日に其威を恣ゝにし。苦痛は時に其度を重ね。彼は五体の不調と心神の疾患とに呻吟し。日ならすして惱亂狂死せりと。是れ自から招く佛天の冥罰にあらすして何ぞ。

叙し來れる處是小松原法難の光景にあらずや。斯の如く景信の迫害は聖祖日蓮の遭難中に於ける一大法難にして。若し鏡忍及ひ吉隆の死を以て之を禦くなくんば或は聖祖の骨を此地に曝せしや知るべからず。然るに常爲法故而衛護之の金言は事實によつて符合せり。茲に於てか聖祖の確信は。更に一層鞏硬なるに至れるを知るべし。

今小松原に於ける東條景信の法難に就て。聖祖日蓮が其當時の狀況を寫されたるものを。遺文によつて求め來らん。則ち南條兵衛七郎に贈られたるもの之なり。

今年も十一月十一日に。安房國東條の小松原と申す大道にして。申酉の時計りに數百人の念佛者に待懸られて。但し人十人計りにて物の用に値者は僅かに三四人也。射矢は如ク降雨ノ打太刀は如ク電ノ弟子一人は當座に打殺され。二人は大事の手にて候。自身は切られ打れ結句は命に及ひたりしが。如何か候ひけん。打漏されて今まで生て侍り。彌々法華經の信心こうさせりて候へ。第四ノ卷ニ云。而此ノ經ノ者如來ノ現在ニハ猶多ク怨嫉ス況ンヤ滅度ノ後ニヤ。第五ノ卷ニ云ク一切世間多ク怨難ス信ス等云々。日本國に法華經を讀學する人是れ多し。人の妻をうばひ盜等にて打はらるゝ人多けれども。法華經の故にあやまたるゝ人は無シ一人也。されば日本國の持經者は名計りにて。未此經文には値せ給はす。但日蓮こう讀侍れ。我不愛身命但惜無上道是れ也。されば日蓮は日本第一の法華經の行者也。云々

「聖勞書」

一讀し來らば此の法難の劇烈にして。如何に危害の聖祖に逼り來りしやを知るに足るべく。『弟子一人は當座に打殺され。二人は大事の手にて候。自身は切られ打れ。結句は命に及ひたりしが。如何か。候ひけん打漏されて侍り』。と危險なりし實況を叙せられたるも

の。吾人は筆しつゝも。尙戰慄の感にうたるゝを覺ふ然れども聖祖日蓮は此法難に由つて。不惜身命の金剛心を鍛煉せられたるは。『彌々法華經の信心こうまさりて候。乃至但日蓮こう讀侍れ。我不愛身命但惜無上道是れ也。されば日蓮は日本第一の法華經の行者也』と自讃せられしを以て　。眞意を窺ふに足るものあらん

法然善導等の書貢て候程の法門は。日蓮十七八の時より知て候き。此比の人の申す事は不ゝ過ゝ之ニ結句は法門には協はすして鬪にし候也。念佛者は數千萬人の方人多く。日蓮は唯一人方人は一人も無ゝ之。今迄も生て候は不思議也（南條兵衛七郎書）

嗚呼實に不思議なり。小松原の遭難に際して景信が重る怨みの白刃。聖祖日蓮の頭上に閃電の如く落下し來れるに。僅かに三寸の傷傷を受けしのみにして。此危機を遁ることを得られしは。聖人すら既に『今までも生て候は不思議なり』と自白せらる況んや吾人の推測遠く及ばざるを察知すべきなり。

夫然り而して東條景信は。實に聖祖日蓮を斬殺せんと試みし。彼か胸裡は如何に憤懣と以て充されしかを知るべく。其由來する處を求め來らば。立敎開宗の當時清澄山に於て堂々四個格言を唱導せられたるに起因し拾二年の歲月を經たる已後に於て此一大法難を現出す依之吾人は想ふに。建長五年四月廿八日の清澄山頭に於ける聖祖日蓮の建宗開敎の宣言は。如何に壯烈なる快事にてありしかを想到するに難からず。東條一類の徒が之が爲に深く怨を結ぶしと以ても推知すべく。小松原の法難は實に偶然にてはあらざるなり。

聖祖日蓮と東條景信の關係は粗度之を叙し來れり。上人をして死地に陷らしめし景信は。佛在世に於ける調達に比すべく吾人の筆するも心に快とせざる處のものにして。大に嫌忌すべき法仇を以て目せしに。聖祖日蓮は實に彼を以て左の如く聖斷を下されたり。

今世間を見るに。人をよくなすものはかたうとよりも强敵が人をよくなしける也。此鎌倉の繁昌は義盛と隱岐の法皇をしまさすは。爭てか日の本の主とはなり給ふべき。されば此人々は御一門の爲には第一の方人也。日蓮が佛にならん第一の方人は景信法師には良觀道阿彌陀佛。平左衛門守殿おはしまさずば爭でか法華經の行者とはなるべき。

（種々振舞書）

聖祖日蓮は東條景信を待に『第一の方人』を以てせらるゝこと夫れ斯の如し。吾人の凡慮を以て聖人の禁懷を信ふ。固より其當らざるや論なしと雖ども。其最强敵たる景信良觀等を捉へ來つて　第一の方人なりと斷言せらるゝに至つては。吾人は呆然たらざるを得ざるなり。

試みに一面より東條景信を觀察せんか。實に惜むべく斥ふべき敵として。之と秤量するや蓋し至當なりと雖ども。又他の一面より彼を窺はん歟。大に稱賛すべく歡迎すべきものあるを信ず。并は則ち東條景信によつて法華經の金言は確證せられ。聖祖日蓮の覺悟は不動なるに至れるを以てなり。

故に東條景信は一面大法の仇敵を以て吾人は之を觀察し。一面護法の信士として斷論するを憚からず。況んや『第一の方人』として聖祖日蓮の之を迎へらるゝに至つては。うも何人か其非を鳴す事を得べきぞ。

嗚呼聖祖日蓮の襟度の宏量なる。東條景信の怨恨の深厚なる二者相待つて聖祖の傳記中に異彩を發てるもの六百年後の吾人をして敬畏措能はざらしむるものあるは他に比類を觀さる處にして。彼か其身と忘るゝに至るまでも。聖祖日蓮に向つて宿憤を果さんとせる。其勇氣と決神とに至つては吾人は感歎の外なきなり。

聖祖日蓮と東條景信の關係を筆するも。今や六百五十年の古き物語りとなり畏。嗚呼小松原の街頭纍々たる枯屍は。當時の歷史を吾人に語るや否や。嗚呼東海の旭日は。聖祖が開宗の光景を今尙吾人に示すや否や知らず第二の日蓮の出興と。第二の東條景信は。今日に於て見るを得べからざる歟

（完）

經躰無間論の批評

經躰無間論者云く、如說修行抄は經躰無間の明判也、曰く諸經無得道墮地獄の根源云云、此義如何

答て云く爾らす、且く四義を明して破斥す、一に一抄不通の失、二に禁誡に背くの失、三に方便を顚倒するの失、四に當文解釋の失なり、」

第一一抄不通の失を示さは、若し爾前の諸經々躰無間の無數なれは、何う時に依て利害變更するとやらんや而るに宗祖は明らかに此抄に於て、小乘流布して得益あるへき時もありと判せり、然は此抄は單に經躰を論するに非す、時之相應不相應に約して、經經の利害得失を判したる書なり、若し否と云はゝ宗祖の言忽ち自語相違す、無間の經躰何れの時たりと雖も　何ぞ得益あるの理あんや

第二禁誡に背く失を示さは、宗祖云所說佛法を修行せ

んには人の言を不し可し用、仰て金言を可し守也と禁誡し給ふ事、已に此抄の初めにあり、然は諸經の經躰を論する場合に於ても、此禁誡を守らざる可らず、若し過不及の義を私に建立せば、則此禁誡を犯すもの也、故に宗祖此抄に諸經を判するに、但に自語を以てせず釋尊の金言を以て證明す、其文曰以方便力四十餘年未顕眞實(是一)終不得成無上菩提(是二)世尊法久後要當說眞實(是三)無二亦無三除佛方便說(是四)正直捨方便(是五)、乃至不受餘經一偈と禁め給へり云云(是六)當知へし此等の諸文一つも墮地獄の證にあらす、皆是諸經無得道の證文なり、一抄通覽すとも此外に諸經に關する金言を引給はす、宗祖此金言を守て義を結て云、是より已後は唯有一佛乘の妙法のみ、一切衆生を佛になす大法にて、法華經より外の諸經は一分の得益もあるべしき云云と判し給ふ、宗祖何う自誓の禁誡を破て、金言の證を用ひす、私に諸經々躰墮獄の釋を成し玉はんや

第三に方便を顛倒する失を示さは、宗祖は四十餘年の諸經を方便權教と正に此抄に判す、夫れ方便と者此より彼れに至る所名なり、若し論者の如くならは、此人界より彼の地獄に至る所名と方便權教と云ふにはなれ而るに宗祖の解釋は論者と反せり、則此書に云本師釋迦如來は初成道の始より法華經を說んと思食しかとも衆生の機根未熟也しかは、先つ權經たる方便を四十餘年の間說き、後に眞實たる法華經を說給也已上、此御判明々白々として惑ふ所なし、四十餘年の權經は衆生の法華經を聽聞すへき根機なきを、聽聞し得へき樣に熟さしめたる方便なると、文に有て明々白々たり、されは諸經は此人界より彼の佛界たる法華經へ至らしむる方便たると浮ひなし、云何なる義か有て地獄に至らしむる方便と云ふや、但其經躰に背き邪義を附會して用る者は此限にあらす

第四に當文解解の失を示さは、御抄の諸經無得道墮地獄の判を正當に釋せんと欲せは能所の釋を作るへし、其故は宗祖此語を結ふに諸宗の人法共に折伏して御覽せよと決判し、單に諸經を折伏して御覽せよと云はす故に知ぬ無得道墮地獄の折語は人法二者に亘ると明けし、然らは諸經の言諸宗を離れたる諸經に非す、正しく諸宗所依の諸經なるへし、反例せは、秀句に天台所釋の法華經と云ふか如く、餘人に解解せられたる諸經なり、依て其義を示さは、本來所依の諸經は無得道(金言に準)なる上、餘見なる諸宗の諸經を破り、如て諸經墮地獄の敎となると云義也、猶委く示さは、此抄曰法華經より外の諸經は一分の得益もあるべしきを、末法今の學者、何れも如來の說敎なれは皆な得道あるへしと思て、諸宗諸經を取取に信する也、如し是人を(若人不信乃至入阿鼻獄と定給へり已上、文中に(諸經は一分の得益もあるべしきを)とは是れ其經躰を判す、次に(末法今學者何れも如來の說敎なれは皆得道あるへしと思て諸宗諸經を取々に信する也)とは、能餘の人と所餘の經とを示判す、又次(如是人をは若人不信入阿鼻獄)とは、金口の命令に背き可信の法華經を信せす、不可信の諸經を信する惡果を示す、されは無得道と指したるは諸經本來の經躰なり、阿鼻獄と指したるは能餘の人なり、義を以て推せは能所相關する故、所餘の諸經も亦阿鼻誘引の惡法となる事理の當然なり、故に下の諸經無得道墮地獄の諸經は、能所關係の諸經なる事明けし、單に諸經は墮地獄の根源と云はすして、無得道墮地獄と順を追て釋し給ふ事、誠に無理なく釋尊の金言を守り、過不及の失なく眞に聖判たる事自ら顕現して、自他共に仰信歸伏するなり

但此一段は末法の時に約して義を立つ、故に文に(されは末法の今學者等)と云ふ、正法千年の比なれは權經は勿論、小乘を依經とすとも墮獄の罪なき事は上に示すか如し

東京淺草區新福井町住
明治三十四年十二月六日登下に書す　法華經熟心生

●みどりのしたゝり

謹啓、予が愛讀する圖報は、貴下が主幹の下に益々其特色を發輝致候、至賀々々。

廿世紀今代の布敎術は、文筆傳道に越すべしと、思ふものも無之とは、予が平素の確信に候が、貴下は何とこう被存候や、言論(此に言論と云ふは辯舌傳道を指す也)は勿論宗敎家として分時も休止し難きは當然なれども、寧ろ今日の如く文學旺盛の時代に於て、其之が對比輕重を語らしめば夫れ文筆乎、尤も斯く云ひたればとて、何處までも言論を文筆の以下として呼はんとするにてはなく、社會の現狀に顧てかくは申すに候面して文筆と申さば、雜誌等の事業に勝れるものありとも覺へず、殊に文字を解するものをして、速に信仰念を誘發せしむるは此等雜誌事業に候べし、故に耶敎の如き最も此に重きを置き、或は高尙に、或は平易に或は社會面より、或は敎義上より、あらゆる手段を盡

して此を誘引致居候。されば其功果決して空からず、青年學生等の彼教の人となるもの尠からず。見受候、況や文筆より得る處の信徒は、通常中等乃至以上の教育あるものなるが故に無智のものを數名教化なしたるよりも以上なるべく候はん。素より賢愚何れに於て教化の價値を論するには無之學あり智あるものを教化誘導すれば、其人又他を誘導するに足るの實力あるからにかくこの意味を以て申すに候、貴下よ、予は以上の如く文筆　即雜誌等の布教が最大なる有力傳導なるとを信ずる者なるが故に、貴下が主幹になれる圖報が歳月と共に發達進歩するを見て、歡喜の情に堪ざる者に候

冀くば更に大に爲にせられんとを嘱望するものに候

貴下よ、私信に於て他を評するは甚良ろしからぬとなれども、序なれば申候べし、所は予が親友上田不新君に候、君の文筆は其天賦の筆才に候乎、筆路所謂大家の口吻に遠きも、其筆頭の一度紙に摩するや一氣呵成縱々として數千言を成す亦快を行らしむるもの也。其一小片言に於て兎角の批評を爲すものあれども、君の如き今や將に、文海の幽境に突進せんとせるの時代也思ふ存分に意志を發展するものにして、遠慮もころも要せざるの時代に候はん、予は切て御之を歡ひ、居候

末來文筆の明星たる不新君の如き才筆家が、本宗内にあるとを予は深くよろこぶものに候、願ば大成あらんとを希ひ居り候、

貴下よ、貴下が過日姫路國友如淡氏の葬典に際しての吊電は、靈前に於て予が代讀の榮をにない候、國友氏の死は、實に本宗僧俗の俱に等しく哀惜する處に候。それに附けて感ずべきと多々有之候が、氏の命圏今は未亡人たる繁野子婦人の日記に候、日記と申すも氏が逝去の二三日前より臨終に至る迄の婦人と氏との間に於ける應對談話の筆記に候が、言々句々、皆活ける法門ならぬはなく、讀み去り讀み來り、誰とて涙ならぬものは無之。後來信徒の永き鑑鑑となるべきものに候不肖予は其日記を借り受けて、後來婦女子の永き鑑鑑と致度と存候。予は國友氏の心を讀みたるもの一つを得候其情は切に思ひ候へども元より拙なるものなれば御斧正を乞ふ

のりのため死する今はのうの身にも
　　祈るは法の榮なりけり

國友氏淡台の目的は、必ずや利益の上よりも、直接布教の上よりも、弘法の誠心に出でしや論なく候へば、法の爲に死したるものと予は見るものに候さて次に其際會葬ありし野口義禪師、石淡日穀師、清瀬真雄師、吉田日梓師、能仁事一師、等の教傳うの後の日野老師の妙立寺客殿に、夜もすがら旨高き法談、趣味多き文學談有之候、予も其圏樂中の一人に候し、只遺憾に思ひしは貴下が其座中にあらざりしとに候、猶一層の花や咲かんものなりしにおしくこう覺へ候、

貴下よ、目下寒氣嚴し乞ふ爲法自愛あらんとを。くだらぬ筆の思出がき、他は又の音信に可申候。早々不一

二月十一日　　松尾忍水

山根青村墨兄貴下

故國友如淡居士吊文

前號に載すべかりし、圏友如淡居士本葬の際捧讀せし吊文の重もなるもの二三を得たれば、後ればせながら茲に之を掲載せん、

吊本宗大優婆塞統一圏友國友如淡之英靈

儀敬白諸佛所師妙法蓮華經、若境若智釋迦多寶、應點五百本佛別付上行薩埵之再身宗祖日蓮大上人等、方今所圏維本質院正念日勇居士、凡人之所貴氣節矣、氣節能不所動物欲、而能將物與我制内與外、君既有此氣焉、君一慨然樹立於法旗、諸宗異俗淘然湧于此、平其干擧法鼓、士民悅服翕然從之、君天資穎敏胸宇快濶、而玄心活步俊氣高邁、道映當時神超世表、是皆君所得也、所謂氣節精華乎、故闢三藏重關顯一乘冲微、檢活步迦夷爲法城之壍、當此時權小邪徒紛然競起殆乱正義、乃仰以慨聖教之淩夷、俯以悼群迷之緩惑、將遑拯沈淪、所以防正閉邪大明於宗致者矣、言論鮮明明事理、群籍博統淵玄、明惠内融妙思外格、蓋遠契聖教玄旨、可謂過維摩百笏之功也、嚮悲哉臺灣滯留中以明治三十四年十二月十一日遠逝、聞彼蘇武入胡國十九年、案龍書通心緒、方今居士別乞婆數日月、送鶯教訪菩提、彼付鳥爲使、鴻賓來而不言、此以佛爲使、鵝王行而應拜、抑生死二法一心妙用、有無二道本覺常途也、生時無來死時不去、諸佛悟之故登四德覺體、凡夫迷之故輪回六道、無有生死若退若出、居士以可瞑乎哉、南無妙法蓮華經

維時明治三十五年壬寅一月十一日

東播明石圓乘圏若傳燈

圏友　梵音院　日穀　敬白

吊詞

行者の命終るや、百佛千佛來迎ありて手を取て淨土に

導き給ふ事は、聖訓に於て明けく示し給ふ處也、豈歡喜の感涙押へ難きの事ならずや。されどもろこは人の情、別るゝの時之を惜み、終らんとする時之を悲み、祭りて之を回想す、皆是情の動くに因る也、雨の來らんとして風を起し、舟の行かんとして波を作すにあらずや、是れ皆事あるの愛惜也情致也、況や人の斯事あるに、更に大なる愛惜情なからでやは、本宗信徒國友如淡氏は正義の大居士也大信士也、平素常に爲法外護の任を全ふしたるは、諸種の點に於て人の音く知る處、殊に業務を帯びて渡灣す、不幸病魔の襲ふ處となり、昨三十四年十二月十一日遂に彼地に於て不歸の客となる、予等此報に接したる時は、一度は虚の如く一度は夢の如く、更に又呼然として愚の如かりき、思へば數月前氏の渡灣の砌、岡山停車場に予等數伍のもの地方信徒を代表して氏を送る、プラットホームに笑を以て應答し、流笛一聲の別れは遂に今生の大別となりしか、嗚悲哉、思茲に至りて胸塞り言句絶し亦云ふ處を知らざる也、本宗の行者元より安心立命あり、然りと雖虚こゝに至ては情湧き血熱す、敢て愚ととのみ見るへからざる也、されど這の悲嘆決して實むべきことにあらず、何となれば世は半固ならず、水沫泡煙は皆てより我等の覺悟せる處なれば也、げに暮行空の雲の色、有明方の月の光、なぜて心を催さゃらんや、花の春、雪の朝、さては風戰き村雲迷ふ其夕、いとゃ無常のことの偲ばれて、風の前の燈のごと、あはれに思を運ぶものを、今更めて知りしが樣なるは便なき業也、さらば如淡氏の逝去は、爲法の大外護を失ひたる上に於ては最大なる嘆なれども、今本覺寂光の都へ遊びて常我淨樂の國に娯樂快樂し居給ふと見んに、何事か悲みなるへき、高祖上人御遺文に云く、今日蓮が弟子檀那等南無妙法蓮華經と唱ん者に、千佛の御手を授け給はんこと、譬は瓜夕顔の手を出すか如くと思召せ、過去に法華經の結緣強なる故に、現世に此經を受持し未來に佛果を成就せんこと不可有疑云々、今此啓なる祭典に會し、聊か至誠を靈前に吊す、夫れ冀くは饗けよ焉

明治三十五年一月十一日

松尾英四郎謹白

吊詞

人誰か死なからん、然れども其有爲の人材を死ろす豈悼まざらんや、況や本宗の爲に無からでは叶はざるべきの大信士を失ふに至ては、豈夫れ何の言を以て之を吊せん、悲嘆其極に達する也、國友如淡氏が生前本宗に盡されし事や、決して言語を以て云ひ得べきことにあらず、其財の上に其言論の上に、而して宗法事あるや百里尚遠しとせずして東奔西走、以て一意專心宗法の發達を是念ふ、洵に斯の如きの人を大外護者と謂はずして、誰人をか云ひ得へきぞや、氏が今や靈山の都へ往詣し佛身を成せるは、衆と等しく歎ふ處なり、雖、本宗前途此有爲の大善士を失ふたるを思へば、轉た長歎息に堪へざる也、然れども氏の靈よ、願くは來つて予等の外護の行爲を守護する處あれよ、予等は誓て氏と共に爲さんと誓ひし宗法隆盛の途を計るへし、冀くは予等の微意のある處を諒して、而して微顔淨土の大地より看下し給はれよ、謹て之を述ふ、來り饗けよ焉

顯本法華宗

岡山市信徒總代久城茂太郎

吊辭

嗚呼痛哉時ハ維レ明治三十四年之臘月地ハ維レ絶海之天地台灣之新領土畏友如淡國友君溘焉トシテ逝キヌ噫哀哉

君資性温厚篤實啻ラ東都ニ遊ビ深ク東西ノ學理ヲ究メ嚢中哲理宗教ニ於テ最モ造詣スル所アリ故アル哉其一タビ法華ノ妙典ヲ繙クヤ談博ナル識見ト卓越ナル眼孔トニ依リ眞理ノ實在ヲ認メ翻然大ニ悟ル所アリ遂ニ法華妙宗無二ノ信仰者トナレリ爾來一意專心宗教的理性ノ涵養ニ努メ朝ニハ佛陀無限ノ慈悲光明ヲ仰テ自ラ道念ノ堅固ヲ誓ヒ夕ニハ聖僧日蓮ノ卓見所謂末法濁乱ノ世時機相應ノ法ヲ講ジテ倦マズ實ニ身ハ非僧世俗ノ塵境ニアリテ其心靈ノ高潔ナル誰カ隨喜渴仰セザルモノアランヤ

君曩キニ賀城ニ在ルノ日佛教ノ振ハザルヲ慨シ有志ノ士ト謀リ姫路佛教青年會ナルモノヲ組織シ廻ルガ如キ熱誠ト信仰トヲ以テ教界波瀾ノ渦中ニ投ジ日夜之ガ畫策ニ鞠躬盡瘁貢献靜カラザルモノアリ然リ而メ前途尚ホ君ガ手腕ヲ待ツベキモノ多々アルノ秋天餘命ヲ藉サズ不幸二竪ノ犯カス所トナリ天涯異郷ニ在リテ黄泉ノ客トナレリ眞ニ痛恨ニ堪ヘザルナリ

茲ニ妙立精舍ニ於テ端嚴壯麗ナル葬送ノ式典ヲ擧ゲラル不肖六藏席末ニ列シ轉タ追懷惜ク能ハズ姫路佛教青年會ヲ代表シ聊カ蕪辞ヲ綴リ吊辞ニ代ヘ靈前ニ捧グ如淡國友君ノ英魂髣髴トシテ來リ饗ケヨ

姫路佛教青年會々長　三宅六藏

明治三十五年一月十一日

●故國友如淡君を吊ふ文

天地寂々として萬籟聲を收め、夜色沈々として寒威刀の如く、一穂の寒燈は凝つて彌々紅に、志士經卷を繙けば蓋世千古の大聖は髣髴として眼界に映じ、肉躍り骨動き胸中萬斛の感に勝へざらしむるの時に當り、忽然として雲を破り哀々として孤雁一の悲報を齎らし來れり、曰く臺地に於ける國友如淡氏沒せりと、余之を聞き愕然として驚く、嗚呼是れ虚報にあらざるなき歟、或は疑ふ南柯の一睡夢にあらざるなき歟と、然れども事實は如何せん、報は虚報にあらず又南柯の一睡夢にもあらざる事を、嗚呼悲哉、指を屈すれば余始めて君と相知る實に今を距る六年前、統一四箇の格言論は以て天下の耳目を聳動し、而して播磨龍野に於ける法戰、本多師の雷霆叱咤の大雄辯、以て念佛僧俗等の蟄を破り顔色無からしめられし當時に在り、爾來君と相會すること數回、慨らくは未だ胸中を披瀝して共に天地の大法を論じ快談すること無かりし事を、而して傳へ聞く君が胸中に蹈れる商業的雄心は、前途遠大なる希望を懷抱し、勃々として抑ふるに由なく、崎陽萬々たる客年の六月、風光明媚なる播磨を後へにして、遠く臺地に赴かしめたりと、當時余は竊かに杞憂すらく、風土の激變は以て君の健康を侵すことあるなからん歟と、爾來消息を絶つ半歳、余が杞憂は事實となれり、臺地の瘴煙癘霧は、以て君の健康を破れり、以て君の生命を奪へり、嗚呼悲哉、抑も君の爲人や强毅勁直にして而かも温乎玉の如く、至公至明にして得易からざる有道の君子たり、宜なる哉君の胸底に欝勃せる高潔なる信仰は一見眉宇の間に躍如とし、關西有數の居士を以て宗家の爲に貢獻活動せられし事を、嗚呼今や白法沒して光芒微薄たり、黑雲天を覆ふて日月を辨せず、人は癡迷に彷徨して善惡を顚倒し敗德の風潮は彌々出でゝ彌々邪智に、無賴の奸黨は彌々出でゝ彌々天下を攪乱し、邪教彌々出てゝ彌々跋扈し、惡漢百出、滔々たる天下乱麻の如く、混濁關々國家多難、愛國の志士をして憤慨一番國家に飼はしむるの秋の當り、此の至誠熱烈なる正法護持の偉丈夫を失ふ、余愛豈斷腸愁絶無限の感慨なきを得んや、豈幾行の血涙滂沱たらざるを得んや、頭を上げて遥かに西南の天を望めば一星殞ちて雲漠々、思ひを天涯萬里に馳せんと欲するも君應へず、去て白玉樓中に在り嗚呼悲哉、然りと雖も君が平素より決定せられし信念は、一轉能く實相本有の大道に入り、寂光不毀の常住淨土、諸天天鼓を擊ち天人充滿せる園林に於て、本覺顯照の靈月に嘯さつゝあらん、往事を追懷し來れば君の魁偉なる風丰は恍惚として眼前に在り、人生の至誠情緒惻々として哀悼の至りに堪へず、一言以て弔詞と爲す、南無妙法蓮華經

明治三十五年一月　本化沙門　堺田聖道　敬白

成岡通信

盛岡佛教顯正會員　小山理介報

編輯局各位、拙き筆もて東北教況の一斑を御報告申上候、我が東北地は何時迄もみちのく然として、遠く法澤に沾ほはず、蓋尙暗き迷信の百鬼夜行、神も佛も有ばこそ、天然物崇拜の靈風吹き荒み、生等其情弊を惡むや久し、時なる哉昨三十四年は新世紀の初年とやらにて、邪教徒も少しく蠢動を初め、大袈裟にも大擧傳道なるゝ、是れ等驕慢の反動かあらぬか、大眞理の餘光漸く東北に及ひ、加ふるに如何なる星の巡り合にや、昨年五月本多日生山根顯道南法蓮の御巡教以來、教勢頓に增加し、續て八月には北海道布教視察員河野日台僧正の御立寄を幸ひ、顯正會にて嘆顯し三日間の大梵音、法益甚大、年の十一月には田邊僧都の御來盛あり、又もや開く顯本の花、人代れども色も香も唯一佛乘の花莚、數十年來迷信の淵に沈みし本宗教徒、大法の光明に眩惑し、一時狼狽反抗の聲有之しも、今や全く鎭靜に歸し、雜乱勸請物の取拂を實行し、或は捨邪し或は歸正の体と爲りたるは、爲國爲法返す〳〵も喜しき限りに有之候　宗運隆盛に向はしむ可き今日を致せる、偖に本多、山根、河野、田邊諸法將の御盡碎、其の英名や顯正會員一同の感涙敬慕措く能はざる次第に有之候、建宗六百五十年の芽出度新春を迎へたる吾會は、早春教界に一花咲せんと意氣込み居りしに、敢なくも合壁の親友二百十員、雪中行軍に仆れたる騷動にて、追吊法會やら義損金募集等に熱注し、少敎好果も有之、他宗派の輕擧忘動よりは慥に手應有之候、二月十六日は吾會の通常會にして、幸ひ宗祖の降誕會に相當しければ、同日午後一時會員一同法華寺に參集、嚴かに法眼を捧げ畢て會員諸氏の祝賀演說相開き申候、顯本講員婦人會々員等會する者五十有余名、余簡單に開會の辭を述へ、併て宗祖の恩なる題下に少しく縷々仕候、次に幹事阿部秀三君は宗祖發顯の大本尊、中村藤助君は本化再誕論なる各題下に、滔々演せられ頗る盛會に有之候、殊に中村君の演說は、氏の特有なる快辨

にて宗祖の芳觸と遺文錄とを對照し、身讀法華經の實踐とを遂へ、日蓮だに此の國に生れずは勸持品二十行の偈文は忘語となりぬべし云々の祖判を朗讀し、來會者一同の一入感激を催したるは、仲々に喜ばしき極に有之候。右演說了りてより時遲れながら、新年宴會相開き、來る紀念會には中央準備會と氣脈を通じ、宗祖の御志願を實顯せしむ可く大努力すべきを決議し、余の發聲にて顯本法華宗萬歲を三唱、靄々の內に薄暮散會仕り候、殘近々足尾鑛毒被害民救濟演說をも開き、無告三十萬の同胞を救濟すべく、努ひる覺悟に有之候得ば、今後運動の結果は、又々御報告申可く候、擱筆、

●開宗紀念大會彙報

▲第二中央準備會

は去月廿三日午前九時小博馬町祖師堂事務所內に開會來會者左の如し

井村恂也、花房日秀、吉岡吉兵衛、柴田日球、關田要叔、菅塚清次郎、竹內久一、鈴木時學、刈米是寬、小笠原日發、小島存省、山川智應、青木英雲、小島德次郎、井上倫吉、飯田宗隆等の各委員、田邊善知、島田魔琴、江上詩義、本多日生等の各顯同諸師

中川常務委員は先づ事務の經過幷に諸般の報告を終り本日協議案の說明をなし討議の結果左の決議をなす

○聖祖御直筆名門の末裔を宗門名族と名け各名族の代表者を求めて協贊員とする事

○六日間の大擧傳道中每夜合宿所若くは適當の場所に於て廿九日の宗徒大會に對する協議會を開く事

但し本件には別に宗徒大會委員を設け原案の編成全國有志より議案徵集の方法及其取捨協議會列席者資格の認定會場の撰定等に當る、此委員は顧問の撰任に托する事

○大會の諸經費は會員及び義助者を募集して其會費幷に寄附金を以て之に充つる事

會員より入會と共に會費金五十錢を徵して紀念章を送る事

協贊員及其他の篤志者より義助金の寄附を乞ふ事

寄附義捐者に對しては紀念章の他にうの篤志を表する方法を採る事

義捐金は金五十錢已上多寡を論せず

會費及義捐金の募集は全國の各準備員擔任して四月十日迄に徵集を終りて本部へ送金を了る事　但し期限後と雖篤志の義助は之を受く

會費及び義捐金は其封中爲替受取人を「東京芝區二本榎町橘銀行支店宛」、封皮は「東京日本橋區小傳馬町祖師堂內紀念大會事務所江上勝義宛」に送付の事

○各地方準備員は各錄司其他の有志者に依頼する事

○宣言書は各協贊員準備委員及全國新開雜誌社に配布する事

○「開宗第六百五十年紀念大會」と稱する顯末書を印行して全國に頒布すること

○紀念式、演說會、大擧傳道、合宿所等の規定は別置委員に於て制定する事

○紀念章意匠考案は竹內久一氏に依囑し協贊員、準備員、會員及義助者の四種を作る事

○準備委員(中央)各部擔任者增加は各部委員の協議を以て適當の人を撰み囑托する事

○三月二日(第一日曜)正午より開會の事

右にて午後六時一同散會せり

▲各派各本山宗廳への交渉

は未だ充分ならざりしが該委員關田氏等は近日確實なる交渉を遂げらるゝ旨確定したり

▲宣言書の發表準備員の囑托

本會宣言書は去月廿六日を以て發表され夫々發送を了したり宣言書の本文は左の如し

日蓮聖人開宗第六百五十年紀念大會宣言書

我皇の叡字明治三十五年は實に吾本化開敎第六百五十年の佳節なり、茲に同志相謀り、闔宗大擧して開宗第六百五十年紀念大會の盛典を、中央帝都に嚴修せんとす、惟ふに宗門は古來每歲の御忌及び每遠忌を修するに專らにして、未だ曾て開宗紀元の盛儀を擧げたることなし、蓋し聖涅槃の報恩會は、迢遠反始の大道、宗徒たるもの、うの聖日に丁て之を修するは、實に諸佛の赤誠に出づ、洵に當然の事と謂ふべし、而かも是れ宗徒自身に在ては猶消極的報恩たり、若し夫れ開敎立宗の祝節に至ては、曾に報本反始の大義皆ひ同じきのみならず、迫かに　聖祖當年の意氣を追懷し來て宗門の性命を自覺し、立敎の大抱負大規模に想到し、活氣爵然として勃興し、宗風盡然として作らん、然らば則ち開宗紀元の祝典は、之を積極的報恩と謂するとを得へし、聖涅槃は　聖祖に約せる非滅の滅なり、開宗は宗法に約せる非生の生なり、相資て而して八法の双全を得ん、噫鷲林夕暉を追ふの孝たるを知て　澄山旭光を仰ぐの誠を少きたるは　偶宗門矚々の銳氣を沮する所以にあらずや、宗門が今日に至るまで、開宗祝節の盛儀を擧ぐるとなかりしは、眞に一大闕典と謂ふへき也　開宗紀念會の要うれ斯の如し、吾が同志舊て大に之を祝せんと欲し乃ち開宗第六百五十年紀念大會の擧行を宣言する所以なり　願くは之を以て上　祖恩の萬一に酬ひ　下宗徒の氣節を鼓舞し、以て大に法威を天下に輝し、宗風を四海に、揚ぐるを得ん、大會所期の大綱凡そ四あり、曰く大祝典、帝都の中央に莊嚴盡なる儀式を張て、この聖節を慶讃し奉る事、曰く大擧道路演說、全國敎徒の有志相携へて、約一週間帝都至る所に街頭說敎を以て、本化秘妙の敎理を、世間の上下に鼓吹する事、曰く施本布敎、聖祖金口の梵音を一般世間に紹介せん爲め、御妙判（如

說修行抄等）の印本を法施する事。曰く宗徒大會。此佳會を好緣として全國各教團の志士を會し、無限の交誼と溫むると共に宗家萬年の大計を協議する事、是れ也、吾が同志の畫策決議せる事上の如し、望らくば茲大祖典を以て、宗門啓運の一新紀元たらしめん、海內同門の四衆、異躰同心の聖誡を服膺し、相呼應して此淡古未曾有の壯擧を贊襄し、闔宗一體の大動作として、神聖なる開宗第六百五十年の佳辰を祝し奉らんかな。襲て宣言す。

明治三十五年二月廿五日

開宗第六百五十年紀念大會

紀念大會協贊員（いろは順）

上總本國寺　板垣　日慶　本山實相寺　石川　日豊
本山佛現寺　伊里　日遍　宗會議員　伊東　日規
宗會議員　伊奈　日要　東京善性寺　飯野　宣了
東身延本覺寺市川　日調　立正安國會理事長　伊東　智靈
伯耆松崎　市橋　龜藏　大本山法華經寺　濱　日運
本山妙法寺　花房　隆誠　大阪妙福寺　早川　日倫
下總本行寺　長谷川日濟　上總妙福寺　錦織　日航
東京妙國寺　本多　日生　身延覺林坊　堀　日溫
身延大學院　本間　海解　備前日應寺　逸見　日謙
總本山久遠寺豐永　日良　本山根本寺　富田　海音
長崎本蓮寺　貫名　日達　美作妙法寺　貫名　見祐
東京髮印寺　小川　日豊　上總西福寺　小高　榮都
上總延福寺　大塚　琢專　本山妙顯寺　福田　堯專
東　京　青藤　顯一　上總本滿寺　坂本　日桓
上總光明寺　笹川　日方　大阪蓮成寺　清瀨　貞雄
柴又題經寺　皆川　文明　播磨姬路　三宅　六藏
本山妙成寺　藪田　本能　本山妙國寺　神保　辨靜
京都成就院　白井　日熙　本山國前寺　正田　英恩
京都瑞光寺　毘尼蘇台嚴　本山海長寺　守本　文靜
甲斐長遠寺　望月　日諦　攝津清音寺　關　日懿
本山妙法寺　關野日專

●宗友會第五回の會合　は本團の當番にて、月の初六小傳馬町祖師堂內に催せしが、生憎田中居士の病氣欠席、加藤中村其他有力なる諸士の無止差閊ありて欠席せられたるも、本多、田邊、小笠原、山根、井村、山川、淺野、桑原、中川等の諸師の出席あり。本團々員及安國會々員等十數名の傍聽ありて、繼續問題となれりし別勸請の可否に就き、小笠原師の歷史考證によりて可論を主張せられたる。本多田邊兩師のそが駁論として絕待否認を論斷せられたる、約四時間の論戰に議論終結、別勸請は事實上否認となり畢りたり、則ち左の決議をなして午後三時散會せり

一前々會より繼續講究せし別勸請論は終結せしを以て其速記錄を發表すべき事

但し本論に就て尙ほ論議の必要ありと認めたるものは隨意本會に呈出することを得

一次回の研究問題は

一、信念成佛論　一、事一念三千論
一、即身成佛論

●顯正會の宗祖降誕會　特別團員鈴木暲學師の設立に掛る顯正會にては、去月十六日午後一時淺草吉野町圓常寺に於て、宗祖降誕會を修せられ、法要了りて演說會開演、社會の狀態（有田宏道）應病與藥（松崎事成）日蓮上人を憶ふ（石川顯隆）降誕會（井上仙吉）名勝の關係（山根顯道）聖祖出世の元由（鈴木暲學）日蓮聖祖の對外的方針（田邊善知）八宗の本尊（小林日至）諸士何れも熱心に辨了せられ、法益多大なりしとぞ

●弘通所の開山會　去月十八日淺草新福井町弘通所に於て開山會營修、通夜の御修行ありて、特別團員小林老上人の「折伏の實義」同田邊上人の「開山上人」の演說、其他信徒の隨力演說あり、餘興には葉月の講談福引等あり、參詣の善男善女堂內に滿ち、報本反始の美風益々盛んなる由、

●青森步兵第五聯隊凍死者追悼會　は去月十五日淺草妙經寺に於て修行せられ、寺主田邊團員の悲痛なる追悼演說ありて、參詣の男女無限の感に打たれたりとぞ

弘前本行寺　加藤　日照　本山日本寺　加藤　日慶
宗會議員　加藤　日寧　宗會議員　加藤　是本
宗會議員　加藤　日凝　熊本本妙寺　金崎　惠厚
上總本松寺　橫溝　日凝　立正安國會創業員　田中　智學
東京妙經寺　田邊　善知　本山孝勝寺　瀧戶　本榮
堀之內妙法寺武見　日恕　備後妙政寺　檀上　日輝
本山本立寺　津田　日厚　本山報恩寺　辻井　日淨
本山弘法寺　梨羽　日環　上總乘王寺　中田　日達
宗會議員　仲西　頭延　上總淨泰寺　中村　乾信
東京盛泰寺　村上　宏玄　攝津堺　村上　貞藏
本山妙顯寺　宇田川日堯　本山溪原寺　野田　寬英
本山光勝寺　野崎　泰辨　京都妙滿寺　野口　義禪
本山本門寺　久保田日臨　本山妙法華寺久保田日遙
備前岡山　久城茂太郎　東京顯本寺　山岬　日暲
本山本遠寺　山田　日偉　備中盛隆寺　山本　隆海
上總行光寺　山岡　會綏　宗會議員　松原　日慧
遠江妙立寺　牧田　日禧　本山龍口寺　藤原　日迦
本山鏡忍寺　藤卷　日道　筑後妙正寺　藤本　日性
本山連永寺　小泉　日慈　東京弘通所　小林　日至
上總本隆寺　河野　日亘　東京祖師堂　江上　勝義
本山妙宜寺　遠藤　日運　本山妙照寺　遠藤　日治
本山妙興寺　瑚　日遵　宗會議員　照山　日榮
豐後法心寺　阿部　日洗　宗會議員　相磯　寬修
本山正法寺　荒居　養善　本山本土寺　齊藤　日意
宗會議員　佐々　通圓　出雲常教寺　佐藤　日翔

●論文募集に就て　吾人の希望と題せる一章、日比野觀義師より到着したるも、原稿締切後にて其全文を掲載する能はず、されど同師が苦辛經營の勞を無視するの嫌いあり、且つは時日の次號を待つへからざる都合等もあれば、其必要點のみを列擧せん、讀者請ふ同師の意を諒して成効に資する所あれ、

一論文募集期を更に四月五日迄延期す（最後）

一論文頁數は八頁迄隨意とす

但し既送者にして再稿加筆せんと欲する人は返信料封入申込さるべし

一事業完成は五月八日迄延期す

一喜捨金申受期は五月五日迄とす

○　宮澤圓隆

破佛破儒をもて得意とせられし本居宣長が自著古事記傳に論ふ國土の成り立ちてふ一節は予の常に珍とし奇とするところ予は今これを一首に約めて未だ耳にせざる諸君に紹介し盃かんと欲す請ふ一讀の榮を賜へかし

さくばひのしたゝりこりて國土なれり
　　努あやしみぞ神のみしわざ

彼がいはゆる國土成立の說明は予がこの三十一文字にて概ね了解せられしならん識者若し聞あらば宜しくこれが論評を試み併せて國土創成の原由語を換へて云は

ゞ空劫より成劫に變遷せる時代の狀態をも事觀的に成る可く平易にして而も明晰に說き示されなば世の文明に裨益を與ふること蓋し以て尠からざる可き乎敢て冀望す

廣告

足尾鑛毒被害民救濟義捐金領收報告

盛岡佛敎顯正會

一壹圓　阿部秀三　一壹圓　中村藤助
一參拾錢　金田岩吉　一參拾錢　佐々木岩太郎
一參拾錢　池田クニ　一參拾錢　原勝外
一貳拾錢　長岡德太郎　一貳拾錢　中村吉太郎
一貳拾錢　島川ナミ　一貳拾錢　小山理助
一貳拾錢　大坊德藏　一貳拾錢　古川平吉
一拾錢　江柄元　一拾錢　宮川長吉
一五錢　松館作兵衛
小計
金四圓六拾五錢也

廣告

主筆　田中智學居士

妙宗

毎月一回（六日）
毎號大附錄附發行
所相模鎌倉要山師
子王文庫
定價一部金十錢
（附錄共）郵稅金一
錢壹ヶ年前金壹圓
貳拾錢（不要郵稅）

送金は師子王文庫宛鎌倉局振込の事

三月六日「第五編」第三號」既刊

主筆　加藤文雅

日宗新報

毎月三回（八の日）
發行、發行所武藏
池上日宗新報社
定價一部金五錢、
十八冊（半年分）
八十五錢、冊六冊
（壹年分）壹圓六十
五錢、一切前金の事、送金は池上郵便受取所へ振込み一日宗新報主任加藤文雅」と御指定の事、一月八日『創立第八百六輯』『革新第二百三十輯』既刊

廣告

一本誌は毎月一回十五日を以て發行期日とす

一本誌は一冊五錢十二冊前金五十七錢廿四冊前金一圓八錢郵券代用は一割增但五厘切手に限

一講讀申込の節は住所姓名を楷書にて認むべし

一爲替は武藏國品川郵便局へ向け御振り込の事

一本團は別に領收書を發せず但し領收證を要する向は返信料を封入するか或は爲替振込の節拂渡濟通知料貳錢を振出郵便局へ納付すべし

一廣告料は五號活字廿四字詰每一行金七錢なり

明治卅五年三月十五日印刷發行

發行人　井村恂也
編輯人　山根顯道
印刷人　鈴木暲學

東京府荏原郡品川町元南品川四百十二番地

發行所　統一團團報部

統一團報

第八十四號

目次

⊙日蓮上人の教誨（接前）……聖歴院稿
(15)佛教と經濟思想　(16)譬如大雲
(17)三善知識　(18)廣くして深し
(19)廣くして深し

⊙本門の木尊……本成院説教

⊙我此土安穩……壽量院法話
まゝならぬ浮世　欲望に際限なし
欲望の妨害物に二有　失敗より來る厭世觀
完全なる人生觀　吾人の究竟目的
超越的滿足　汝等當信解

⊙常樂院日經上人（承前）……野口義禪稿

⊙紀念大會記事摘要……

⊙岡山に於ける管師の社會概況……久城多吉

⊙作陽教勝報……影山懸雲

⊙東北巡教感信……秋葉顯正

⊙第十九教區建宗紀念會概況……孤松子

⊙改宗者

⊙品川寺院の紀念法要

⊙清澄山本地の躍……上田不新

開宗六百五十年紀念階段

廣告數件

明治三十五年四月十五日發行